

スウォヴァツキ と英文学

劇が始まるまで——スウォヴァツキ『コルディアン』

の「幕が開くまで」はどのようにできているか？

土谷 直人

§. 1

ポーランド・ロマン主義を代表するスウォヴァツキ(Juliusz Słowacki 1809-49)やミツキューヴィッチ(Adam Mickiewicz 1798-1855)、それにクラシンスキ(Zygmunt Krasiński 1812-59)は、ギリシア・ラテンの古典主義教育を受け、古典的人文主義的教養を十分に身につけていたことは言うまでもなく、仏、独、露文学にも精通していた。なかでもスウォヴァツキは英語を学んでいたから、これらの文学に加えて英文学にも深く通じていたといつてよいであろう⁽¹⁾。

「わたしが人生を知ったのは、人と接触した結果ではない。本と接触した結果である」と書いたのはアナトール・フランスであるが、まさしくこのタイプにスウォヴァツキも属すると断言してよいであろう。初めにクシェミエニェツのリセー、後にヴィルノ大学の国文学の教授の息子として生まれ、また母親も仏文学などを嗜んだ家庭に育ったスウォヴァツキは両親の書棚から数々の作品を手にとって読み耽ったであろうと思われる。こうした読書体験が、単に彼をかなり早熟な文学少年、詩人・作家に仕立て上げたばかりではなく、また彼の作品は数多くの外国文学からの影響を受けたものとなっている。そもそもが、強大な文化圏に挟まれた小国の文学は、それら大国の影響を受け易いものであるが、この意味において、スウォヴァツキの作品はまさしく比較文学に多大の材料を提供してくれる素晴らしい宝庫となっているのである。

こうして、ほんの2、3の例を挙げるとすれば、例えばポーランド人シベリア流刑囚を背景に描かれたかなり宗教的な作品である“Anielli”には、彼の個人的体験やイマジネーションの他に、『聖書』のモチーフや、ダンテの『神曲』のモチーフが色濃く反映しているし、また“Maria Stuart”には、W.シェイクスピアやW.スコットと並んで、F.シラーの作品が影響を与えていると言われている⁽²⁾。さらにまた、希代のホラふき男爵たる実在の人物A.M.ベニョフスキのウクライナ時代を描く“Beniowski”も、L.アリオストの『狂乱のオルランド』

や、世界各地の『ドン・ファン』伝説の趣向を借りているようである。加えて、ロシアのピョートル大帝のよきライヴァルとなったウクライナ独立運動の闘士マゼッパを描く“Mazepa”も、あるいは、その執筆の動機をヴォルテールの『シャルル十二世史』ばかりではなく、バイロンの『マゼッパ』に負っている可能性がある⁽³⁾。

これだけの例からも、まことにスウォヴァツキが世界の各文学から自己の作品の栄養分としたものは極めて大量であることが予想されるであろう。こうしたスウォヴァツキの態度をW. スパソーヴィッチは次のように描いている。

「スウォヴァツキは頭で生きていた人であった、つまり観念と想像力で生きていたのである。このために彼はしばしば自分の先行者・先駆者たちの観念と一体化し、同時代人、もしくはシェイクスピアであれ、カルデロンであれ、のすでにできあがった構想を取り上げ、そして独自にそれらを加工し、仕上げ、汲めども尽きぬ空想力の宝庫で飾り立てたのである。」⁽⁴⁾

§. 2

このように同時代人のモチーフ、あるいは他国のすでに有名となった作家の作品などをモデルに次々と彼の作品は作られたが、それでもやはり彼は独創的な作品を相次いで発表していった。彼はまるで日本文学における「本歌取り」の名手のようであった。それらの作品のうちで、英文学の影響を受けていると思われる作品には、すでに前述した作品以外にも、“Kordian”や“Balladyna”それに“Maria Stuart”がある。しかしながら、この小論においてはスペースの関係もあり、“Kordian”のみを取り上げ、その中でも主として“Przygotowanie”(『幕が開くまで』)の部分を取り上げることとする。

“Kordian”の形式と内容についてあらかじめ述べておきたい。この作品は、内容としては、ポーランド人のロシア人王に対する暗殺未遂事件の首謀者のKordianを描いたかなり政治的なドラマで、1834年に匿名で出版されたものである。スウォヴァツキは、ウィーン会議後に成立した「会議王国」の王として戴冠したロシア皇帝ニコライ・ロマーノフに対する暗殺陰謀事件をめぐる三部作を構想し、その第一部のみを完成したが、それがこの“Kordian”である。

“Kordian”は『幕が開くまで』(304行)、『プロローグ』(46行)、『第一部、第一幕』(501行)、『第二幕』(299行)、『第三幕』(1239行)から成っており、お

のおのの簡単な粗筋は次のようになっている。

『幕が開くまで』は、この小論の主題であるから後に詳述するが、このような設定自体がゲーテの『ファウスト』などの大きな影響を受けていること、時は「1799年12月31日夜」という、今まさに19世紀が開始されようとする時点で、場所はカルパチア山脈の山中。ここに魔女、メフィスト、アスタロット、サタンといった悪魔たちが集まり、19世紀のポーランド史に必要な人々を作り上げる。（次いでながら、これらの歴史上の人物に対するスウォヴァツキの評価もここに読み取れるであろう。）最後は神の世界、天使の合唱、それに首天使の言葉で終わっている。

『プロローグ』で、スウォヴァツキは、陰謀者の事件を続けようとする歴史家・革命家のJ.レレーヴェルの立場、そして詩人・文学者で革命家のA.ミツキエーヴィッチに代表される「戦いに疲れ果てた」国民に予言者的な慰めを与える立場、そして自分自身の立場の三つを、対比させ、それぞれ「第一の人物」、「第二の人物」、「第三の人物」の口を借りて語らせている⁽⁵⁾。

『第一部、第一幕』で、この物語の主人公のKordian——恐らく、ラテン語の cor= 心から取られた名前であろう——が登場する。彼は15歳の田舎貴族の息子である。この幕では、自らの生きがいを求めて苦悩するさまが描かれる。

『第二幕』では、——1828年頃と推定されるが——10代後半から20歳前後の主人公が描かれる。ロンドンを放浪し、ドーヴァー海峡を渡り、若く美しいイタリア娘に恋心を抱き、ローマのヴァチカンで法王に会見したり、またスイスのモンブランに登ったり、と主人公の「青春遍歴」は続く。実際この『第二幕』は、バイロンの『チャイルド・ハロルドの冒険』を想起させる。彼のスイス滞在の実体験とともに、またバイロンの『マンフレッド』もこのようなコルディアン「青春遍歴」に影響を与えているものと思われる。氷河に覆われたモンブランの山頂でコルディアンは、数々の心の動揺、逡巡の後に、遂に自分の身を祖国のために捧げることを決意する。

『第三幕』は、1829年5月にワルシャワで行われたツァーリ・ニコライのポーランド王即位の戴冠式から始まる。「笛吹けど踊らぬ」他の陰謀家たちに代わって、コルディアンは自分がツァーリ暗殺者となることを決意する。しかしツァーリの寝室前で、良心の叫び、恐怖感などの混じった幻覚に襲われ暗殺を執行することなくバツリと倒れ、彼は「狂人として」逮捕される。ニコライとコンスタンチン大公が罪人の刑の重さを巡って対立——コンスタンチンは何かと斬首を避けようとする——し、最後に刑一等を減じる早馬が刑場に急行す

るが、執行吏は早馬に気付かず、刑執行の合図の手を振り上げた、というドラマチックな緊張感を誘った形で、この戯曲は終わっている。これが『コルディアン』の梗概である。

§. 3

前述のように、長さからいっても“Przygotowanie”はこの劇中でかなり重要な位置を占めている、といってよい。あるいはまた、——後に、少しばかり述べるように——ここにはスウォヴァツキの隠れた歴史・哲学・宗教思想が盛られているが故に重要である。

“Przygotowanie”は、19世紀が始まる直前の1799年12月31日の夜から始まり、「陰気な明けの明星がきらめくまでに」終わることになる。恐らくフォークロアのコンベンションから、このような設定になっているのであろう。また舞台は次のように設定されている。

カルパチア山脈中のかつて有名だった魔術師

トファルドフスキの小屋——小屋には広い中庭
がある——遠景に岩山——下手に無数のブナ林。

暗闇が稲妻によって跡切れる。

魔女が髪をとかし、歌う……

トファルドフスキはやはりフォークロア的・伝説的人物で、ドイツのいわばドクトル・ファウストに当たる人物である⁽⁶⁾。

この魔女によって、「美しい天使の姿をした」Szatanが紹介され、サタンはウィサ・グーラ（はげ山の意）へと飛んで行く。ここに、一万ものサタンが集結するのである。その中には“Astaroth”、“Diabli”、“Gehenna”がおり、後になって“Mefistofel”が現れる。この中でやはり重要なのは主人格のサタンであり、このサタンの命令によって、他の「^{ディアブリ}悪魔たちが働く」ようになっている

サタンの世界観を探ってみよう。時計の針が1800年を告げつつある時、サタンはこのように述べている。

おお世界よ！ 世界よ！ 世界よ！

永遠のヘビがとぐろを巻いてお前を苦しめ、
毒牙で少しばかり脇腹を食べ、
そして世紀は、死者の思い出を塵として撒きながら、
お前を思って死ぬのだ。

俺はお前の始まりを見たのだ。
腐敗した空気に包まれた、あの一握りの粘土、
天棺に閉じ込められたカオスの死体
時の腐敗に毒されて、
鉱石の錆と御影石の骨を我身にまとい、
花々や森の産毛をまとい、
それから虫^{ロバキ}を生み…… (62-72) ⁽⁷⁾

地球が「一握りの粘土」から、「腐敗した空気」＝ガスによって囲まれ成長したものであり、天棺（恐らく宇宙の意）に閉じ込められたカオスの死体であり……などという世界観も実に面白いものであり、これらはまた当時の天文学、宇宙科学——例えば La Mettrieの“L’homme plante”、Buffonの説、J.G.Herderの“Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit”の説くところと大変近い、などとポーランドの研究者によって指摘されているが⁽⁸⁾、しかしそれよりも、サタンが、またサタンの口を借りたスウォヴァツキがこの地球世界を、永遠のヘビがとぐろを巻いて苦しめている、というように見做し、「そして世紀は、死者の思い出を塵として撒きながら、お前を思って死ぬのだ」と理解しているのが大変面白い。近隣三国による三度に及ぶ分割、その時々^のの反抗による多大な人的犠牲——ポーランド人にとって、この世は大いなる苦役であり、この苦痛に満ちた18世紀は遂に「死んだ」。アスタロットがそれを告げ、サタンがこう答える。

アスタロット 1800年になりました。

サタン それでは拷問の輪が全部回り終えたのかい？ (84-85)

日本語で「サタン」を「悪魔・魔王」などと訳してしまうと、どうもうまくニュアンスが伝達されないことになるのだが、スウォヴァツキのこの作品においては、サタンは明らかに善い意味で使われている。いや、サタンはすなわち、この世の合理的な解釈を求め、変革を求める、18世紀啓蒙主義哲学の申し子な

のである。フランス革命の継承者であるともいえよう。

われらがサタンは奇跡の服を纏って予言し、
ヴォルテールの継ぎだらけのマントを羽織り、
ルソーの驚ペンを頭巾に入れている。 (107-109)

加えて、サタンは「行動の人」でもあり、少なくとも他人に行動を促す指導者なのである。そこでまずメフィストフェレスに

土地の民衆の中から、一人変なやつを選べ
もうドイツ人にはもの静かな博士を見付けることはできまいし
スイスの山々をマンフレッドの輩が歩き回ることもなく、
そして修道士たちも長い断食によって庵室でやせ細ることもない。
されば、兵士を一人気違いにせよ。 (111-115)

と、命令を下す。結局は、この命令が実現し、その主人公がKordianとなるのだが、この“Przygotowanie”では、メフィストフェレスに、「無理だ!」と拒否されてしまう。

しかし、ポーランド国民は、「かつてわれら（サタン）が天主（たる神）と戦ったような戦闘を」行うために、ポーランド政府に必要な人材を作りださねばならないというサタンの要請をメフィストフェレスは受け入れる。

今日は世紀の第一日目、
今日は一世紀間中の
王様や貧乏人を作り出す権利のある日。
それじゃあ、あの民族にお偉方を作ってやろう。
彼らで政府の穴を埋めることができるように。 (139-143)

こうして、サタンの命令のもとに、1830-31年に、対ロシアの大反乱時に政権担当者であった人々が次々に作り出される。スウォヴァツキにとっては、1、2年前に祖国で起こった歴史の同時代史を描いている、といった趣であろうか。実際、彼はこの反乱軍政府の急使としてロンドンに派遣され、目的も達成せぬまま、パリを中心とする西欧に止まらざるを得なくなってしまったのであった。

§. 4

さて、政権担当者、将軍たちは次の「手法」で作られる。

地中と陸の天然自然のあらゆる元素を
大気のカップの中で閉じ込め、
注ぎ込んで一つにし、
化学者に分解させよ。
酸素、炭化水素を
プラチナの大釜に注ぎ込む。
それ、皆の者、霊を吹き込め！……

雷が何回も大釜に落ちる。

自然の大地に、
陰謀をこらし、王を倒した
伍長のピンを投げろ
封ろうの頭をつけて
四万のピンを
大釜にぶち込め……

(151-162)

こうしてでき上がったのが、ナポレオンと共に戦った有名な軍司令官G.J.フウォピツキ(1771-1854)である。文中の伍長とは、ナポレオンであり、「四万のピン」とは、ワルシャワ大公国に許された兵力のことである。いわゆるこの時代のポーランド人の多くにみられた「ナポレオン幻想」がここに潜んでいると考えることもできるであろう。

二番目に作り出されたのはA.J.チャルトリスキ公(1770-1861)であるが、この時には大釜にダイヤモンドが投げ込まれ、「タレイランのインク壺からの秘密のインク」が注ぎ込まれる。ロシア・ツァーリのアレクサンドル一世の友人でもあり、一時期はロシア外務大臣も務めたこともあり、この時期にポーランド国民に人気もあって、大反乱時には臨時政府や国民政府のトップにも立ったことのある大貴族のチャルトリスキを、政治的な意見の相違は別としても、

スウォヴァツキはかなり尊敬していたようであり、「古いローマ人の顔つきをした」、「魔法にもかかわらず、何だか立派な人間」というように形容している。

1831年のポーランド・ロシア戦争において、「二カ月間、自分の敗北の程度を大衆から隠し、小さな軍事行動にかかわっていたかのように、偽っていたが、実際には彼は無責任で犯罪的なほど怠惰であった」⁽⁹⁾と現代史家のS.キェニエーヴィッチに断罪されている軍司令官のJ.Z.スクシネツキ(1787-1860)が三番目に作り出される。彼の材料はこうである。

今度はカニのやつから
目と足をそっくりいただき
雄鶏のけづめをつけよ。
そしてびくびくしているカタツムリ
から取り出した前角を…… (196-200)

四番目に作られたのは、詩人・作家・政治家で、スウォヴァツキにとっても面識のあるJ.U.ニェムツェーヴィッチ(1757-1841)であった。彼を作り出すために、ディアブリは、大釜の中に、「ポーランド人の歴史と、脚韻辞典、百万の印刷活字、それに三粒の眠たげなケシ」を投げ込んだのである。このようにしてでき上がったニェムツェーヴィッチは次のように表現されている。

ヒバリのような老人が
半分凍え、腐り切った
思いでの塊に冷え切っている。
詩人で——騎士で——老人で——いや
何でもない
アポロンの九人のミューズの
単なる宦官さ…… (213-217)

このようなひどい、惨めな表現からも、登りつつあるロマン主義の代表たるスウォヴァツキが、衰退しつつある時代遅れの啓蒙主義の代表にして、政治的には中道を歩んだニェムツェーヴィッチに対して抱いていた感情の一端が窺えよう。

舞台はいよいよ明け方近くなる。そこで急いで悪魔たちは仕事に精を出す。こうしてでき上がるのが二人いるが、まず第一の男は次のような格好をしている。この一節を取り出してみよう。サタンが述べる。

サタン この青白い姿を見よ、
大釜のどろどろからもう半分生まれた。
ほおはこそげ落ち、目の隈は真っ黒、
口は相変わらず満足せぬ思想を語り、
永遠に書物と魂に心を痛め、
曲がった二本足でよろめいている、
まるで不確かな政体のように。
あ、しゃべりたがっているぞ、世界に何
を撒こうというのか、聞いてみようぜ……

像 大釜から頭を出しながら
王がいる時の方がいいかね？ それともいない方がいいかね？……

サタン なぞかけするスフィンクスなぞ消え失せろ！
悪魔自身だって解けやしない、
そんなものは形式主義者のところで
種をまいておくれ、
(246-257)

このようにかなりの程度の皮肉をもって描かれているのが、元ヴィルノやワルシャワ大学の歴史学の教授で、1830-31年には推されて臨時政府の指導者の一人になったJ.レレーヴェル(1786-1864)である。彼がミツキエーヴィッチなどによって教祖的存在として手厚く遇され、高名でもあったが、しかし現実生活においては、とりわけ政治家としては、首尾一貫せず、動揺し、煮え切らない態度を取っていたことをスウォヴァツキは鋭く的確に表現している。

最後に、魔法によって大釜から生まれてきたのは、J.S.クルコヴェツキ(1772-1850)であるが、この將軍はひどく民衆に人気がない。何故なら彼は「裏切り者」で、「死んだ騎士を見捨てて、国の方舟からカラスのように逃げ、翼を震わせ方舟には帰らない」からである。「カラス」は、ポーランド語で“kruk”であるから、ここでもスウォヴァツキは語呂合わせを楽しみ、本名は作品に一字

も出ないが、当時の読者には直ちに誰に対する暗示かがわかる仕組みになっている⁽¹⁰⁾。

サタンの指導のもとに、これだけの人々が作られた。不思議なのは、これらの中に真に有能な人間が一人もいないことである。サタンは「変革」を志向するサタン、フランス革命の伝統を継承するサタンであったはずである。そして「ポーランドはフランス革命の唯一の継承者である」と自覚していたポーランド人が多く存在していたはずなのであるけれども⁽¹¹⁾。ここにポーランドが独立を達成できない悲劇の源が見え隠れしているのであろう。こうしてどこからともなく、天の声が聞こえる。「神の名において！　ここより立ち去れ！　消え失せろ！……」そして最後に残ったのは、天使たちのコーラスと首天使だけであった。首天使の神に向かったの哀願は痛切である。

神よ、この民族を蘇生させる時です、さもなくば完全に滅ぼす時です。

もしも神の御手が彼らを救わずば、

涙より多量の血を流させ給え……

主よ！　われらを憐れみ給え！

すると神はこうのたまわれた。「我が意志は実行されるであろう…」

(296-300)

このように“Przygotowanie”は終わっている。

§. 5

以上、簡単ながら“Kordian”の『幕が開くまで』の内容をみてきたが、ここまで読まれた読者はすでにお気づきであろう。サタンを初めとする悪魔たちの登場、大釜でぐつぐつ煮え立つところから重要人物が作り上げられる場面などから、実によくこの作品がShakespeareの“Macbeth”から多くを借りてきていることが納得されるであろう。

とりわけアイディアを借用しているのは『マクベス』の第四幕、第一場である。一部を引用してみよう。

魔女1　　釜の周りを回ろうよ、

腐った臍物ほうり込め、
まずは冷たい石の下、
三十一夜を眠りつつ、
毒の汗かくヒキガエル、
ぐらぐら煮えろ、釜のなか。

三人 苦勞も苦惱も火にくべろ、
燃えろよ燃えろ、煮えたぎれ。

魔女2 お次は蛇のブツ切りだ、
ぐらぐら煮えろ、釜のなか、
カエルの指先、イモリの目、
コウモリの羽根、犬のべろ、
マムシの舌先、蛇の牙、
フクロウの羽根、トカゲの手、
苦勞と苦惱のまじないに、
地獄の雜煮煮えたぎれ。

三人 苦勞も苦惱も火にくべろ、
燃えろよ燃えろ、煮えたぎれ。

魔女3 狼の齒に龍の皮、
魔女のミイラに食欲な
鯨の胃袋煮えたぎれ、
闇夜に抜いた毒ニンジン、
ユダヤ人から腐れ肝、
山羊の肝汁、月食の
夜に手折った櫟の木、
トルコ人から驚っ鼻、
ダットン人から厚唇、
売女がどぶに産み落とし、
すぐ首絞めた赤子の指、
トロリトロリと煮えたぎれ、
おまけに虎のはらわたを
入れて薬味を効かせよう。

三人 苦勞も苦惱も火にくべろ、
燃えろよ燃えろ、煮えたぎれ。

魔女2　　狒狒の血注ぎ冷ましたら、
これでまじないおしまいだ。(12)

このようなものが大釜にほうり込まれて魔女たちによる魔術が行われ、ここでマクベスは、自分の将来の姿を見ることになる。「幻影1」が現れて、将来のマクベスの姿——マクダフにうちとられた自身の首——を表し、「幻影2」が、母親の腹を切り裂いて生まれ、後にマクベスと対戦して遂にこれを倒すマクダフの象徴であり、そして「幻影3」が先王ダンカンの子で、マクベスの死後王政復古を行うマルカムの象徴である。さらに8人の王の幻影と、バンクォーの亡霊が後に続く。——以上の登場人物＝「影」が、大釜から立ち昇ってくるのである。

このように『幕が開くまで』は、シェイクスピアのアイディアを借用していると考えられるのだが、双方の相違について少しばかり目を向けてみる。

まず第一に気付くことは、さすがにシェイクスピアの方は、文章が軽快でテンポが速く、登場してくる事物が大量であるといえよう。とりわけ小動物へのシェイクスピアの偏愛は際立っているといえよう。「ヒキガエル、蛇、カエル、イモリ、コウモリ、犬、マムシ……」といったように、まるで物尽くしをしているかのようである。これに比較すればスウォヴァツキの方は、もうすでに第4節でみたように、「カニ、雄鶏、カタツムリ」と、たいして小動物への偏愛はみられず、そのかわり「伍長のピン、封ろうの頭、歴史、脚韻辞典……」などという変わったものが登場している。

シェイクスピアが、悪魔学に凝っていたジェイムズ王にお誂え向きに魔女を登場させ⁽¹³⁾、かなり中世のおとぎ話風に作り上げているのに対して、19世紀前半に生きたスウォヴァツキは、大釜がプラチナでできていたり、酸素や炭化水素なども登場する、いわば「科学的」要素も混えた悪魔学を創作している、といえよう。また些細な相違であるかも知れないが、『マクベス』で活躍するのは、魔女とせいぜいヘカティだけであるが、『幕が開くまで』で活躍するのは、サタン、ディアブリ、アスタロット等の多くの悪魔たちである⁽¹⁴⁾。

第二に、シェイクスピアとスウォヴァツキの手法で目立つ点は、レトリックの相違である。シェイクスピアには、相互矛盾したり、お互いに相容れない表現、非論理的な表現、持ってまわった表現が、まま見られる。「戦に勝って負けた時」、「いいは悪いで悪いはいい」（以上、第一幕第一場）「それほどしあわせではないがずっとしあわせなかつた」、「国王にはならないが国王を生み

出すかた」「（マクベス傍白）あの不可思議ないざないは悪いはずはない、いいはずもない。」（第一幕第三場）とか、「いちばん小さいがわが喜びのいちばん小さくはない娘」（『リア王』第一幕第一場）といったような表現をシェイクスピアは多く用いているが、このような表現形式はスウォヴァツキにはないといってよい。20代前半のスウォヴァツキは、まだ深くシェイクスピアを採用するに至らなかったといってよいであろうか。

それにまた数字の使い方がシェイクスピアは実に巧みである。「（マクベスとバンクォー）両將軍はまるで／二倍の火薬を詰められた大砲のように、／倍する力をもって二倍の攻撃を敵に加えたのです」（第一幕第二場）を初めとし、マクベス婦人は「二倍の倍の奉公」を語り、マクベスは「二重の信頼」を裏切る。そして先程の引用文中の「苦勞も苦惱も火にくべろ」も実際は、'Double, double toil and trouble'なのである。魔女たちの言葉には、こうした巧みな数の使い方が、それこそ枚挙に暇がない。一つ二つだけ引用しておこう。「そのまま七日七晩の九九八十一倍まではっとけば、／やつめの五体は目にみえてしなびてやつれて衰える。」「手に手をとってぐるぐると、／おまえ三度に、わし三度、／も一つ三度で、三三が九。／しーっ。これで呪文は結ばれた。」

（共に、第一幕第三場）

残念ながらスウォヴァツキにはこのような細工はないように思われる。もしも使われている数字に大きな意味があるとすれば、一つは、もうすでに第4節で書いたように、「四万のピン」が、ナポレオンの主導の下に創設されたワルシャワ大公国の兵力数を示していることであり、もう一つは「1799年12月31日」という日時に関してである。

この日時に関しては、スウォヴァツキが19世紀の開始を1800年と誤ったのだ、という説もあるが、これは受け入れがたい。何故なら作品自体の中に、サタンの言葉として、次のような一節があるからである。

アスタロットよ

年を数えよ、ひょっとして雲上人の神様が
ある地上の国民を助けんものと雷を落とし、
人間のために一年分短縮した世紀が、

サタンのために一日、一時間を盗むかもしれん。

さればわしゃ神に一時間を催促しよう

あるいはまた反乱の旗を広げましょう。

（76-82）

このようにして直ちに19世紀が始まったのかもしれない。あるいはまた、これはかなり穿ったみかたであるが、1799年から全く新しい時代がすでに始まったのだと考える説もある。それはエジプト遠征から帰国したナポレオンが、「ブリュメール18日のクーデター」を起こし、総裁政府を倒し、統領政府を立てて第一統領に就任した「革命」であったからである。そして彼が第一統領に就任したのが1799年12月26日のことであり、この作品の舞台の数日前であった。現代のわれわれには少しばかり想像しにくいことであるが、ナポレオンは人類史に新しい一時代を画し、「カイン、ルシファー、ファウスト、プロメテウス、それにアハスヴェルスと比べられる」一時代のシンボルであったのである⁽¹⁵⁾。そして恐らくは若きスウォヴァツキもこうしたナポレオン崇拝者の一人であり、ナポレオン伝説を深く信じていたのであろう。

§. 6

『幕が開くまで』がどのように創作されているかについて、やや詳しく検討し、ゲーテの『ファウスト』やシェイクスピアの『マクベス』、バイロンの『マンフレッド』、それに『聖書』やその他恐らくかなりの西欧文学作品からの断片がこの作品にあたかもモザイクのようにちりばめられていることをみてきた。

しかしこの作品には、他の要素も混じっており、それは同国人の論敵、仮想敵に対するスウォヴァツキの返答なのである。実はこの部分が作品中で最も難解な部分を成しているのであるが、ここではスペースの関係上触れない。論敵の最たるものは、西欧亡命ポーランド人社会ですでに確固たる名声を築いていた10歳年長の先輩詩人ミツキューヴィッチであった⁽¹⁶⁾。「スウォヴァツキの詩は素晴らしく、それはまるで高く聳える教会のように美しい建築構造で建てられているが——しかしこの教会には神がない」⁽¹⁷⁾と、先輩詩人に評されたスウォヴァツキは、この作品で時折ミツキューヴィッチに対する反論を、さりげなく潜ませているのである。とりわけこの作品は、ミツキューヴィッチの『父祖の祭り』に対抗して書かれている部分が多いようである⁽¹⁸⁾。

このような、ポーランドや西欧ポーランド人社会の現実に対する発言などは実に外国人にとって理解しにくい部分であり、総じて難解である。あるいはこうした特殊ポーランド的要素が少しばかり混じっているが故に、外国人に理解

されず、普遍的な世界文学になりえない点が、『コルディアン』と『マクベス』を分かつ決定的な点となっているのかも知れない。

『コルディアン』はあくまでもポーランドのドラマである。芥川龍之介が、ゴーゴリの『外套』から、かなり多くのものを借用して『芋粥』を書き始めたが、しかしやはり充分日本化して平安朝の物語りに仕立て上げたように、スウォヴァツキは、シェイクスピアを多分に借用しながら、それでもやはりいかにもポーランド的な作品に仕上げたといえよう。

注

[最初に主要参考文献を掲げ、注にはその番号とページ数のみを略記することにする。]

主要参考文献

- ① J. Słowacki, Dzieła wszystkie, pod red. J. Kleina, Ossolineum, Wrocław, 1952-1975, t. 1-17.
- ② St. Makowski, "Kordian" Juliusza Słowackiego, Czytelnik, W-wa, 1976.
- ③ M. Inglot, Myśl historyczna w "Kordianie", Ossolineum, Wrocław, 1973.
- ④ ANSSSR, Slavianie i Zapad, Nauka, Moskva, 1975.
- ⑤ J. Kleiner, Słowacki, Ossolineum, Wrocław, 1972.
- ⑥ P. Hertz, Słowacki, PIW, W-wa, 1961.
- ⑦ Zb. Sudolski, Słowacki Opowieść biograficzna, LSW, W-wa, 1978.
- ⑧ M. Janion M. Żmigrodzka, Romantyzm i Historia, PIW, W-wa, 1978.
- ⑨ Z. Jakubowski (red.), Literatura polska od średniowiecza do pozytywizmu, PWN, W-wa, 1977.
- ⑩ T. Lenartowicz, O charakterze poezji polsko-słowiańskiej, PWN, W-wa, 1978.
- ⑪ A. C. Bradley, Shakespearean Tragedy, Penguin Books, Clays Ltd., 1991.
- ⑫ S. ケニエーヴィッチ編, 加藤一夫・水島孝生 共訳, 『ポーランド史 2』, 恒文社, 1986.
- ⑬ 渡辺喜之, 「『マクベス』——役者の演劇」 『シェイクスピア全作品論』, 研

究社出版, 1992.

⑭ 小田島雄志訳『シェイクスピア全集 IV』, 白水社, 1986.

⑮ 土谷直人, 「ハイダマキ運動と三つの文学」, 『西スラヴ学論集』第2号, 恒文社, 1991.

注

- (1) 19歳の時に, スウォヴァツキの英語力はめざましい進歩をとげ, 「3カ月でもうかなりバイロンを理解するようになった」と書き残している。⑥, 66. ⑦, 57.
- (2) ⑤, 22.
- (3) ⑩, 123-127.
- (4) ④, 57.
- (5) ⑨, 412.
- (6) ポーランド文学においては, ミツキエーヴィッチの“Pan Twardowski”も大変有名である。
- (7) 作品の底本には①の第2巻を用い, これ以降単に行数のみを本文中に示す。なおロバキとは人間のことである。
- (8) ③, 145-146.
- (9) ⑫, 67.
- (10) 当時の民衆もかなりしたたかに政治・軍事指導者に対して匿名で, 指導者の名前を折り込んだ寸鉄詩を書いていた。そのような例は, たとえば, ②, 81-82. にある。
- (11) ③, 158.
- (12) ⑭, 443.
- (13) ⑭, 597.
- (14) ついでながら, 「稲妻」などの共通性はあるものの, 『マクベス』の魔女登場時における「おどろおどろしさ」や批評家 Bradleyの言ういわゆる darkness や blackness は, 『幕が開くまで』にはみられない。⑪, 306-313. 参照。
- (15) ③, 135.
- (16) このことについて詳しくは⑮, 25-26. 参照。
- (17) ⑥, 127.
- (18) ⑧, 474.